

## 第1回「広島県教育のグローバル化10年展開構想（仮称）」意見交換会の概要

### 1 開催日時

平成26年5月30日（金）13:30～15:30

平成26年6月2日（月）13:00～15:00

※出席者の日程調整の結果、2回に分けて開催。

### 2 開催場所

広島県庁東館4階 教育委員会室

### 3 出席者

（外部有識者）今井	むつみ	慶應義塾大学 環境情報学部 教授
	隈元 美穂子	国際連合訓練調査研究所（ユニタール）広島事務所 所長
	坂越 正樹	広島大学 副学長
	坂田 淳二	Prime Field Asia Limited CEO, ARIGATO HOCKEY 代表
	滝村 典之	マツダ株式会社 人事室 副室長
	坪内 南	一般財団法人教育支援グローバル基金 理事・事務局長
	村上 雅人	芝浦工業大学 学長
（行政関係者）下崎	邦 明	広島県教育委員会教育長

（五十音順，敬称略）

### 4 議事要旨（有識者の主な意見）

#### (1) 育成すべき人材像，基本コンセプト

- ・ 海外で活躍できる人材＝（イコール）グローバル人材ではない。地球規模で物事を考えて、それを広島県の課題にもつなげて解決していけるような人材が必要なのではないか。
- ・ グローバル化をキーワードに学校教育全体を改革するというのが「教育のグローバル化」ではないか。
- ・ 国際機関で活躍する人材を広島から輩出できるとよい。
- ・ 広島の魅力を活かした広島独自のグローバル人材育成について検討すべき。
- ・ 広島県が目指すグローバル人材像を一元化して、みんな同じようなグローバル人材像を目指すというのではなく、幾つかのグローバル人材像というものを考えたほうがいいのか。
- ・ 広島県におけるグローバル化の現状についてSWOT分析をして、それで広島県の特徴を出すというのは重要だ。すぐれたところを伸ばすというのも一つの方策だし、弱点を克服、弱みを強みに変えるのも方策だ。
- ・ 「平和」，「スポーツ」こういったこともひとつの広島のキーワードではないか。
- ・ リーダーとともに、組織のことを考えて行動できるフォロワーシップを持つ人材も必要。

#### (2) グローバル人材に必要な能力

##### ア 語学力・コミュニケーション能力

- ・ 語学力は、ある程度の日常会話は躊躇なくできる力をつけるべきだ。
- ・ TOEICの点数が高くても、海外の人といざ会議で何か話をしようとすると、なか

なか言葉が出てこないという人がいる。大切なのは、コミュニケーション能力である。

- ・ 外国語の教育をいつからするかという問題があるが、必要に応じて必要なだけを行う方がいいのではないか。
- ・ 日本語で論理的に考えて伝えることが出来ないと、英語でもできない。

#### イ チャレンジ精神

- ・ 国連で働く日本人が非常に少ない。
- ・ 他国の人たちと比べて、日本人にチャレンジ精神や忍耐力が少し弱く、それをどう培っていくかが大きな課題である。

#### ウ 自らへの理解と自信

- ・ コミュニケーションは、自らへの理解と自信があってからこそ、本当に成り立つものではないか。
- ・ とてもきれいな企画書を作成して提案してくる若手社員がいる。確かに、いろんなところからいろんなものを持ってきてきれいにまとめる力はあるが、それについて、「あなたはどうか」とその人自身の考えを深く掘り下げるように聞くと、そこで止まってしまいうケースが結構ある。自分の考えをしっかり持つことが大切である。

#### エ 異文化・多様性に対する理解

- ・ 幼いときから他の国を身近に感じる機会が少ない。さまざまな国の人に触れる機会や場をつくることが重要になる。
- ・ 「出る杭は打つ」のではなく「伸ばす」、そういう多様性を受け入れる環境を学校の中でつくり上げていくことを考えてほしい。
- ・ 日本の社会では、将来成功するために人間関係はこうあるべきというような、とても画一的な定義のようなものが決まっているようだ。しかし実際には、いろんな問題が起きるときには起きるし、その場面場面で対処すればよい。おおらかな選択肢が社会に認められていない印象がある。
- ・ 国の違い、民族の違い、性的な違いも含むあらゆる意味での多様性を受け入れる資質が必要になる。
- ・ 広島とか日本がいったいどういう国、地域であるかを知り語ることはとても重要である。多様な価値を受け入れる側がしっかり確立されていなければいけない。それを踏まえて、異文化の人、海外の人と交流すれば、異文化理解にも非常に深みが出る。
- ・ スポーツ選手の実績とその本人が現地（海外）に行っただけなじんでいるかは完全にイコールである。スキルがある選手でもオープンマインドで多様性を受け入れることができない選手は試合でも活躍できない。
- ・ 日本人は批判されることに弱い。批判や文句を言われることがよくないという固定観念があるからなのかもしれない。正解を探そうとすることと、周囲に受け入れられようとするには共通性があるのかもしれない。

#### オ 深く考える力

- ・ 今の日本は受け身の教育である。これからは、一つの情報を自分で考えて分析し、本当にそれで合っているのかというのを多面的に見ながら考え、それを意見交換しながら、よ

りよい解決方法を見出すということが必要だ。日本人はディベート能力が非常に弱い。

- ・ 企業でも、正解を追い求めてしまう仕事の仕方になってくると、上司が何を考えているのかだけを考えるような、そんな人材が多く育ってしまう。
- ・ 答えのない課題は、現実社会の中で非常に多い。学校教育の中で、常に答えがある問題を解いているというところから脱却していくことが大切なのではないか。

### (3) 10年先を見据えた施策展開

#### ア 小・中・高の系統的な教育プログラムの実践

- ・ コンピテンシーについて、ルーブリックの手法により水準を決定できないか。
- ・ 共通性（グローバル・コア・コンピテンシー）は、小学生も中学生も皆が必要である。高等学校段階になると多様性（グローバル・コンピテンシー）が大切で、多様な進路を尊重するのはいいことだ。
- ・ こういったコンピテンシーを育む取組を行うのはとても大切だ。多様性というものを担保した上で、それをさらに伸ばすための環境づくりが重要だ。
- ・ プロジェクト学習だったり体験学習だったり、そういう一つの仕掛けの中で力がつくパターンがある。留学とか、プロジェクト学習とか、そういう仕掛けを次々やっていくことで見えてくるものもあるのではないか。
- ・ 失敗とするか成功とするかは、どの時点で何をもって判断するのかで異なる。例えば、商品開発において、当初の目的どおりの商品はできなかったが、結果として、それが大ヒットにつながったという事例は幾らでもある。まず何かトライしてみるということに価値がある。社員育成でも、会社に対して提案をするプロジェクトワークという取組をする。提案内容の成否ではなく、提案をしたという事実がプロジェクト参加者にとっては大きい。学校でも、積極的にいろいろとトライできる仕掛け、仕組みをつくってはどうか。
- ・ 広島県がグローバル能力を測定するツールを開発したら、これは画期的なこと。これにより、教員、子供、県民など全員で具体的なイメージについて共通認識が持てる。限られた分野でも、そういうものが一つひな形としてあると、ほかにいろいろ応用がきく。また、どれだけ伸びたかという指標が明確化され、取組の効果が教員にも子供にも見えるのが重要である。その際、評価の多様性を確保することも大切。
- ・ 多様性を受け入れるメンタリティや、ポジティブアティテュードのような価値観・姿勢・態度は幼少期の頃から育てていく必要がある。世界が多様化し、知識も多様化する中では、自ら学習する力が重要。

#### イ 高校生の海外留学の促進

- ・ 今県が進めている高校生の留学は、どんどんやればいい。自分がこれまで生活してきた安全な世界から離れ緊張して生活する中で、周りからいろいろな情報を取得し、自分で情報を発信しなければならない状況を生き抜いたというのは、自信になる。

#### ウ グローバル化に対応した教職員の採用育成方針の整備

- ・ 教員というのは、いかに子供に対してやる気を喚起するかが大事である。熱意のある先生に出会い、刺激を受けたら、子供は伸びる。
- ・ 先生の影響は大きい。先生に対する定期的なトレーニングが必要だ。教育委員会は、教えるプロとして自分が何を学ぶべきかを考え行動する先生を育て、サポートしてはいい

けない。

## エ グローバル化に対応できる学校の整備

- ・ グローバル人材を育てるうえで、異なった強みを持つ学校があれば、生徒が将来の進路希望にあわせて学校選択できる。
- ・ グローバル化に対応した教育というのは、全県的に全ての学校で必要。先進的な学校での取組を全県的に波及させていく仕組みが大切。
- ・ 日本の教育が作り上げてきた分厚い中間層は、日本の財産だ。かなりレベルの高い基礎学力があり、そんなに大きな格差がない。それは維持していくべきだが、問題は、分厚い中間層の中が均一化されていることではないか。
- ・ 中学生や高校生が様々な情報をもとに理詰め進路選択するのは難しい。進路を選択してみて、経験をしながら、違うなと思ったら、容易に変更できる仕組みがなければ、生徒の進路希望に合わせた学校整備は実現できない。
- ・ ある進路を選んでしまったことで人生が固定されることのないように配慮が必要。例えば高校選択時にはこういった特色のある学校には行ったけれども、結果としてそれが直接キャリアに結びつかないかもしれないという柔軟性があってもいい。
- ・ グローバル教育を全体的に底上げしていくべき部分と、特化していく部分と、2つのアプローチがあるのではないか。世界に思いをはせる資質や基本的な語学力などは全体のレベルを上げていかなければならない。一方で、例えば、世界や地球を見据えたビジョンがあり、世界から人が集まってくるような特化した学校が広島県にあっても良いのではないか。また、最近人気のあるインターナショナルスクールなど、グローバル教育に特化した学校は私立で学費が高いため、官が作れば全員にチャンスが与えられる。こういった学校があれば、進路や目指すキャリアの視野・選択肢も広がる。
- ・ アジア、中近東、アフリカ、中南米など、様々な国の中学生や高校生が広島に学びに来るような学校があれば、異文化理解を進める上でも、また、人的なネットワークを広げる上でも有効ではないか。ただ、その場合、高校卒業後の将来的なキャリアのイメージもある程度具体的に描き、示していくことが必要。
- ・ 日本の学校はネガティブ教育で、アメリカの学校はポジティブ教育と言われている。アメリカでは、ここまで出来たと褒められるような場合でも、日本では、一定のレベルに達していなければ落第と言われる。このため、日本でインターナショナルスクールを選択する例もある。先生が褒めてくれると子供は喜び、やる気も出る。そういった教育をする学校を、広島に是非作っていただきたい。

## オ 県全体のグローバル化に向けた環境整備

- ・ 子供のころに海外の人と接することは特別なことじゃないと感じる経験をする、後々いろんなことを吸収できる力につながっていく。
- ・ 広島県内にいて、グローバル化を体験するような仕組みも当然必要になる。
- ・ 社会的な多様性に触れることができる機会は大事だ。この構想の中に、本来であれば出会わないかもしれないような人たちと出会い、その人たちとも協働できるようになっていく環境づくりを盛り込めたら素晴らしい。
- ・ 社会的に困難な立場にある子供たち、いろいろな状況でグローバルな道を選択できない子供たちに焦点を当てた特別な取組が別途あるといい。